

妙法蓮華經如來壽量品第十六

爾時仏。告諸菩薩。及一切大衆。諸善男子。汝等當信解。如來誠諦之語。

復告大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。又復告諸大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。

是時菩薩大衆。弥勒為首。合掌白仏言。世尊。唯願說之。我等當信受仏語。

如是三白已。復言。唯願說之。我等當信受仏語。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

その時に仏、諸の菩薩および 切の大衆に告げたまわく、「諸の善男子。汝等は、まさに如來の誠諦の語を信解すべし」と。

また、大衆に告げたまわく、「汝等はまさに如來の誠諦の語を信解すべし」と。またまた、諸の大衆に告げたまわく、「汝等はまさに如來の誠諦の語を信解すべし」と。

この時、菩薩大衆は弥勒を首となして、合掌して仏に白して言さく、「世尊。ただ願わくは、これを説きたまえ。われらはまさに、仏の語を信受したてまつるべし」と。

かくのごとく三たび白しおわつて、また言さく、「ただ願わくは、これを説きたまえ。われらはまさに、仏の語を信受したてまつるべし」と。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

【広開近顯遠斷疑生信・誠信・三誠】

その時、仏は多くの菩薩たちと、すべての法を求める人びとに次のように告げられました。「良家の子息たちよ。そなたたちは、如來の真実の言葉を信じて理解せよ」と。

また、聴聞に集まっている人たちに、次のように告げられました。「そなたたちよ、如來の真実の言葉を信じて理解せよ」と。さらに、重ねて聴聞に集まっている人たちに告げられました。「そなたたちよ、如來の真実の言葉を信じて理解せよ」と。

【三請】

この時、多くの菩薩を初めとする聴衆の者たちは、弥勒を筆頭として、合掌して、仏に次のように申し上げました。「世尊よ、どうかお願いします。お説き下さい。私たちは、必ずや仏のお言葉を信じて、受け入れ申し上げます」と。

【重請】

そのように二度申しおえて、また次のように言いました。「どうか、お願いします。お説き下さい。私たちは必ずや仏の言葉を信じて、受け入れ申し上げます」と。

爾時世尊。知諸菩薩。三請不止。而告之言。汝等諦聽。如來秘密神通之力。

一切世間。天人。及阿修羅。皆謂今釈迦牟尼仏。出釈氏宮。去伽耶城不遠。坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我実成仏已來。無量無辺。百千万億。那由他劫。

譬如五百千万億。那由他。阿僧祇。三千大千世界。仮使人。抹為微塵。過於東方。五百千万億。那由他。阿僧祇國。乃下一塵。如是東行。尽是微塵。諸

したてまつるべし」と。

その時、世尊は、諸の菩薩が一たび請いて止まざることを知るしめして、これに告げてのたまわく、「汝等、諦かに聴け。如來の秘密神通の力を。

一切世間の天・人、および阿修羅は皆、『今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からずして、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり』と謂えり。しかるに善男子。われは實に成仏してより已來、無量無辺百千万億那由他劫なり。

譬えば、五百千万億那由他阿僧祇の二千大千世界を、仮使人あつて、抹して微塵となして、東方五百千万億那由他阿僧祇の國を過ぎて、すなわち一塵を下し、かくのごとく東に行きてこの微塵を尽

【重誡／正答・長行・法説・三世益物・過去益物・執近の情を出す／如來秘密神通之力】

その時、世尊は多くの菩薩たちの一度も請願して、なおあきらめることのない志しを感じられて、次のように告げられました。「そなたたちよ、よく聴くがよい。如來が具えている神祕的で非常に不思議な力を。

【近を破し遠を顯わす・法譬・法説に遠を顯わす／我実成仏已來無量無辺百千万億那由他劫】

すべての世間の者たちは、みな、『今の釈迦牟尼仏は釈迦族の宮殿を出て、伽耶という都城にほど近い菩提樹下の道場に坐して、この上ない覺りを開かれた』と思つてゐる。ところが、良家の子息よ。實は私が仏道を成就してから無量無辺百千万億那由他劫という、思慮を絶する永い時間が経つてゐる。

【譬を挙げて格量す】

その長さは、たとえば五百千万億那由他阿僧祇というばう大な二千大千世界を、ある人がすり碎いて細かな塵として、東方の五百千万億那由他阿僧祇という無數の國を過ぎて、その細かい塵を 粒そこに投げ落とす。

このようにして、どこまでも東の方に進み、塵をすべて

善男子。於意云何。是諸世界。可得思惟校計。知其數不。

彌勒菩薩等。俱白仏言。

世尊。是諸世界。無量無邊。非算數所知。亦非心力所及。一切聲聞。辟支仏。

以無漏智。不能思惟。知其限數。

我等住。阿惟越致地。於是事中。亦所不達。世尊。如是諸世界。無量無邊。

爾時仏。告大菩薩衆。諸善男子。今當分明。宣語汝等。是諸世界。若著微塵。及不著者。尽以為塵。一塵一劫。

我成仏已來。復過於此。百千万億。那由他。阿僧

さんがごとし。諸の善男子。意においていかん。この諸の世界は、思惟し校計して、その数を知ることを得べきやいなや」と。

彌勒菩薩等、ともに仏に白して言さく、「世尊。この諸の世界は、無量無邊にして、算数の知る所に非ず。また、心力の及ぶ所に非ず。切の聲聞・辟支仏が、無漏智をもつて、思惟しても、その限数を知ることあたわじ。

われらは、阿惟越致地に住すれども、この事の中においては、また、達せざる所なり。世尊。かくのごとき諸の世界は無量無邊なり」と。

その時に仏、大菩薩衆に告げたまわく、「諸の善男子。いま、まさに分明に、汝等に宣語すべし。この諸の世界の、もしは微塵を著き、および著かざるものを、ことごとくもつて塵となして、一塵を劫とせん。

われは、成仏してより已來、また、ここに過ぎたること百千万億那由他阿僧祇

投下し終わつたとしよう。良家の子息たちよ。これを聞いて、どのように思うか。そのような多くの世界を、はたして考えをめぐらしたり、計算したりして、その数を知ることができるか、どうか」と。

彌勒菩薩たちは、共に仏に次のように申し上げました。「世尊よ。その多くの世界は無量であり、無邊であつて、数え知ることはできません。また、心のはたらきの及ぶところでもありません。すべての聲聞や縁覺が、煩惱を離れた清浄な智慧をもつて考えても、その無限の数を知ることができません。

私たち菩薩は、すでに決して退かない境地にあります、このことについては、まだ到達することができません。世尊よ。そのような多くの世界は無量であり、無邊です」と。

その時、仏は偉大な菩薩たちに次のように告げられました。「良家の子息たちよ。今、まさにはっきりと、そなたたちに宣言しよう。この多くの世界の内、微塵を投下した世界も、通り過ぎて投下しなかつた世界も、それらをすべて集めて、さらにそれをすり碎いて塵となし、その一つの塵を 劫として数えよう。

【益物の所宜／我常在此娑婆世界説法教化】

私が仏と成つてから、これまでに過ぎ去つた時間は、今の劫よりも、はるかに百千万億那由他阿僧祇劫も長いとい

祇劫。自從是來。我常在
此。娑婆世界。說法教化。
亦於余處。百千萬億。那
由他。阿僧祇國。導利衆生。
諸善男子。於是中間。我
說燃燈等。又復言其。
入於涅槃。如是皆以。方
便分別。
諸善男子。若有衆生。來
至我所。我以仏眼。觀其信
等。諸根利鈍。隨所応度。
處處自說。名字不同。年
紀大小。
亦復現言。當入涅槃。又
以種種方便。說微妙法。
能令衆生。發歡喜心。

諸善男子。如來見諸衆生。
樂於小法。德薄垢重者。
為是人說。我少出家。得
阿耨多羅三藐三菩提。

劫なり。これよりこのかた、われは常に
この娑婆世界に在つて說法教化したり。
また、余處の百千萬億那由他阿僧祇の國
においても、衆生を導利したり。
諸の善男子。この中間において、われ
は燃燈等を説き、またまた、その涅槃
に入ることと言いき。かくのごときは皆、
方便をもつて分別せしなり。
諸の善男子。もし衆生あつて、わが所
に來至するには、われは仏眼をもつて、
その信等の諸根の利鈍を觀じて、まさに
度すべき所に随つて、處處に自ら名字の
不同、年紀の大小を説き、
またまた、現じてまさに涅槃に入るべ
しと言ひ、また種種の方便をもつて、微
妙の法を説いて、よく衆生をして歡喜の
心を發さしめき。

諸の善男子。如來は諸の衆生の小法を
樂える德薄垢重の者を見て、この人の
ために、われは少くして出家し、阿耨多
羅三藐三菩提を得たりと説く。

う、はかりしれない年数である。その時からずっと、私は
常にこの娑婆世界にあつて、法を説き、教へ導いてきた。
また、他の百千萬億那由他阿僧祇の國々においても、多く
の生きる者たちを仏道へと教へ導き、利益を与えてきた。
良家の子息たちよ。その中間において、私は燃燈仏など
のことを説き、また涅槃に入るとも告げてきた。このよう
なことは、みな巧みな教化の方法を用いて、分別して説い
たものである。

良家の子息たちよ。もしも、多くの生きる者たちが、私
の所に來た時には、私はすべての物事を見とおす仏眼で、
その者の信ずる力などの多くの能力が勝れているか、劣
っているかを觀察して、それぞれにもっともふさわしい形
で教へ導き、その場その場で、自らの仏の名前や、どれほ
どの寿命があるかを説き、
また、その姿を示して、まさに入滅するだろうといい、
また、種々の巧みな教化の手段を用いて、おもむき深く勝
れた法を説いて、よく多くの生きる者たちに、歡喜の心を
起こさせてきた。

【三世益物・現在益物・機感と応化の非生現生・現生】
良家の子息たちよ。如來は、多くの衆生が劣つた教へを
願ひ求め、善根がとぼしく、煩惱の垢にまみれている時に
は、それらの人びとのために、私は若くして出家し、この
上なき覺りを得たと説く。

然我実成仏已来。久遠若
斯。但以方便。教化衆生。
令入仏道。作如是説。

諸善男子。如来所演經典。
皆為度脱衆生。或説己身。
或説他身。或示己身。或示
他身。或示己事。或示他事。

諸所言説。皆実不虛。所以
者何。如来如実知見。三界
之相。無有生起。若退
若出。亦無在世。及滅
度者。

非実非虚。非如非異。不如
三界。見於三界。如斯之事。
如来明見。無有錯謬。

しかるに われは実に成仏してより已
来、久遠なることかくのごとし。ただ方
便をもって、衆生を教化して仏道に入ら
しめんとして、かくのごとき説をなす。

諸の善男子。如来の演ぶる所の經典は
皆、衆生を度脱せんがためなり。あるは
己身を説き、あるは他身を説き、あるは
己身を示し、あるは他身を示し、あるは
己事を示し、あるは他事を示す。

諸の言説する所は、皆、実にして虚し
からず。所以はいかん。如来は実の如く
三界の相を知見す。生まれること死する
こと、もしは退、もしは出のあることな
く、また在世および滅度の者もなし。

実に非ず 虚に非ず 如に非ず 異に
非ず 一界の三界を見るがごとくならず。
かくのごときの事を、如来は明らかに見
て、錯謬あることなし。

【非生】

しかしながら實際は、私が仏に成つてから久遠の歳月を
経ていることは、今述べたとおりである。もっぱら巧みな
教化の方法を用いて、多くの生きる者たちを仏に成る道に
導くために、このように説くのである。

【形声の益】

良家の子息たちよ。如来の經典はすべて、多くの生きる
者たちに悟りを得させるために説くのである。あるいは釈
迦仏のことを説き、あるいは他の仏のことを説き、あるい
は釈迦仏の姿を示し、あるいは他の仏の姿を示し、あるい
は仏界のあれこれを示し、あるいは九界のあれこれを示す。

【利益の不虚／諸所言説皆実不虚所以者何如来如実知見
三界之相】

しかし、いろいろに説くことは、すべて真実であり、決
して偽りではない。なぜかといえ、如来はこの世界の
真実の姿を知り尽くしているからである。すなわち、生ま
れたり死んだりすることもなく、あるいは退いたり 出た
りすることもなく、また世にあつたり 入滅したりするこ
ともない。

真実でもなく、虚妄でもなく、そのようなものでもなく、
別のものでないと見るのであつて、凡夫がこの世界を見
るさまとは、全く違つている。このように物事を如来は明
らかに見るのであつて、決して見間違えることはない。

以諸衆生。有種種性。種種欲。種種行。種種憶想。分別故。欲令生諸善根。以若干因緣。譬喻。言辭。種種說法。所作仏事。未曾暫廢。

如是我成仏已來。甚大久遠。壽命無量。阿僧祇劫。常住不滅。

諸善男子。我本行菩薩道。所成壽命。今猶未盡。復倍上數。然今非滅滅度。而使唱言。當取滅度。

如來以是方便。教化衆生。所以者何。若仏久住於世。薄德之人。不種善根。貧窮下賤。貪著五欲。入於憶

諸の衆生には、種種の性、種種の欲、種種の行、種種の憶想・分別があるをもつての故に 諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因縁と譬喩と言辭をもつて 種種に法を説く。所作の仏事を、いまだかつて暫くも廢せず。

かくのごとく、われは成仏してより已來、はなはだ大いに久遠なり。壽命は無量阿僧祇劫なり。常住にして滅せず。

諸の善男子。われがもと菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命は、今なおいまだ尽きず。また、上の數に倍せり。しかるにいま、実の滅度に非ざれども、しかもすなわち唱えて『まさに滅度を取るべし』と言う。

如來は、この方便をもつて、衆生を教化す。所以はいかん。もし仏が久しく世に住せば、薄德の人は善根を種えず 貧窮下賤にして、五欲に貪著し、憶想妄見の

多くの生きる者たちには、さまざまな本質、さまざまな欲求、さまざまな行為、さまざまな想いや考えがある。そのために、多くの善根を得させようと思い、いくつかの由來や譬喩、語源解釈を用いて、種々に法を説くのである。仏は、仏としてなすべき仕事を、いまだかつて、時も休んだことがない。

【応化の非滅現滅・本実の不滅・果の常住】

このように、私が仏の覺りを得てから、数え切れない時間経過している。その壽命は無量阿僧祇劫という長さをもち、常に存在して滅することはない。

【因を挙げて況す／我本行菩薩道所成壽命今猶未盡復倍上數／迹中の唱滅】

良家の子息たちよ。私が昔、菩薩の因行を修して得た壽命はまだ尽きておらず、成仏してからの百千万億那由他阿僧祇劫に倍する時間がこれからもある。しかるに今、本當の入滅の時ではないけれども、『私は、まさに入滅するだらう』と、人びとに告げる。

【現滅の利益】

如來は、巧みな教化の方法を用いて、多くの生きる者たちを教え導くのである。なぜかといえ、もしも、仏が長く世に止まるならば、福徳が薄い者たちは、善根を積もうとはせず、その結果、貧しさに苦しみ、身分も賤しく、五感

想。妄見網中。

若見如來。常在不滅。便起憍恣。而懷厭怠。不能生於難遭之想。恭敬之心。是故如來。以方便說。比丘當知。諸仏出世。難可值遇。

所以者何。諸薄徳人。過無量百千萬億劫。或有見仏。或不見者。以此事故。我作是言。諸比丘。如來難可得見。

斯衆生等。聞如是語。必當生於難遭之想。心懷戀慕。渴仰於仏。便種善根。是故如來。雖不実滅。而言滅度。

又善男子。諸仏如來。法皆是。為度衆生。皆実不虛。

網の中に入りなん。

もし如來が、常に在つて滅せずと見ばすなわち憍恣を起こして厭怠を懷き、難遭の想と恭敬の心を生ずることあたわじ。この故に如來は方便をもつて説く。『比丘、まさに知るべし。諸仏の出世には、値遇すべきこと難し』と。

所以はいかん。諸の薄徳の人は、無量百千萬億劫を過ぎて、あるいは仏を見、あるいはは見ざる者あり。この事をもつての故に われはこの言をなす。『諸の比丘。如來は見ることを得べきこと難し』と。

この衆生等は、かくのごとき語を聞いて 必ずまさに難遭の想を生じ、心に戀慕を懷き、仏を渴仰して、すなわち善根を種ゆべし。この故に如來は 實には滅せずといえども、しかも滅度すと言う。

また 善男子。諸仏如來の法は皆、かくのごとし。衆生を度せんがためなれば、

から生じる欲望に執着して、誤つた思いと見解という深い網の中に取り込まれてしまふだろう。

もしも、如來は常に世の中にあつて、入滅することはな いと思つたとたん、彼らはおごり高ぶつて氣ままになりなまける心を起こしてしまい 仏に出會うことは難しいという思いや、仏をつつしみ敬う心は生じることはないだろう。それゆえ 如來は巧みな教化の方法を用いて 『比丘よ、心を尽くして知れ。多くの仏が世に出現されるのに出會うことはむづかしい』と説くのである。

なぜかといえ、多くの福德の薄い人は、無量百千萬億劫という長くはかりしれない歳月を経過して、ようやく仏を見ることが出来る者もいれば、それでもまだ見ることで出来ない者もいる。それゆえに 私は、『多くの比丘たちよ。如來を見ることが出来るのは、本当にむづかしい』と告げるのである。

この多くの生きる者たちは、そのような言葉を聞いて、必ずや仏には値ひ難いという思いを起こし、心に戀慕の氣持ちを懷き、仏を求め慕い、そこではじめて、よい報いを生み出す行為に励むだろう。それゆえ如來は、本当の入滅の時ではないけれども、しかも入滅すると告げるのである。

【総じて不虛を結す】

また、良家の子息よ。多くの仏・如來が説かれる法は、すべてそのようである。多くの生きる者たちを導くためな

譬如良医。智惠聡達。明練方藥。善治衆病。其人多諸子息。若十。二十。乃至百數。以有事縁。遠至余国。諸子於後。飲他毒藥。藥發悶乱。宛転于地。

是時其父。還來歸家。諸子飲毒。或失本心。或不失者。遙見其父。皆大歡喜。拜跪問訊。

善安穩帰。我等愚痴。誤服毒藥。願見救療。更賜壽命。

父見子等。苦惱如是。依諸経方。求好藥草。色香美味。皆悉具足。擣撻和合。与子

皆、実にして虚しからず。

譬えば、良医の智惠聡達にして、明らかに方薬に練じ、善く衆病を治するがごとし。その人に、諸の子息多し。もしは十一十、乃至百数なり。

事の縁あるをもつて、遠く余国に至りぬ。諸子は後において他の毒薬を飲む。薬が発し、悶乱して地に宛転す。

この時、その父が還り来たつて家に帰りぬ。諸の子は毒を飲み、あるいは本心を失い、あるいは失わざる者あり。遙かにその父を見て、皆、大いに歡喜し、拜跪して問訊すらく、

『善く安穩に帰りましたまえり。われらは愚痴にして誤つて毒薬を服せり。願わくは救療せられて、更に壽命を賜え』と。

父は、子等の苦惱することかくのごとくなるを見て、諸の経方に依つて、好き薬草の色香美味にして、皆ことごとく具

ので、すべてが真実であり、決して偽りなどない。

【譬説・医師譬・医師が遠く行くを過去に譬う】

譬えば、賢くて道理に通じ、薬の調合をよく心得、多くの病氣を治す良い医者がいたとしよう。その人にはたくさんの子どもがいて、その数は十人・二十人、あるいは百人に及んだ。

ある時、用事ができて、彼は遠い他国へ出かけた。多くの子どもたちは、彼が出かけた後に、誤つて毒薬を飲んでしまう。すると、その薬が作用し、子どもたちは悶え苦しみ地面を転げまわった。

【還り已て復去るを現在に譬う・機感に譬う／応化に譬う・非生現生】

その時、父は他国から家に帰ってきた。多くの子どもたちは毒薬を飲んで、すっかり本心を失った子もいれば、失わなかった子もいたが、父の姿を見て、みな大いに歡喜し、ひざまずいて、次のように問いたずねた。

『よくご無事でお帰りになされました。私たちは、愚かにも、誤つて毒薬を飲んでしまいました。どうぞお願いします。治療をして、命を助けて下さい』と。

父は、子どもたちが苦しみ悩む姿を見て、多くの処方に基づいて、色も香りも味もすぐれた、すばらしい薬草を求め、押しつぶし、ふるいにかけて、混ぜ合わせてから、子ど

令服。而作是言。

此大良藥。色香美味。皆悉具足。汝等可服。速除苦惱。無復衆患。

其諸子中。不失心者。見此良藥。色香俱好。即便服之。病尽除愈。

余失心者。見其父來。雖亦歡喜問訊。求索治病。然与其藥。而不肯服。

所以者何。毒氣深入。失本心故。於此好色香藥。而謂不美。

父作是念。此子可愍。為毒所中。心皆顛倒。雖見我喜。求索救療。如是好藥。而不肯服。我今當設方便。

足せるを求めて、擣き篋い和合して、子に与えて服せしむ。しかして、この言をなさく、

『この大良藥は、色香美味にして、皆ことごとく具足せり。汝等服すべし。速かに苦惱を除いて、また衆の患なけん』と。

その諸子の中に、心を失わざる者は、この良藥の色香ともに好きを見て、すなわちこれを服するに、病ことごとく除こり癒えぬ。

余の心を失える者は、その父の來たれるを見て、また歡喜し、問訊して病を治せんことをもとむといえども、しかしてその藥を与うるに、しかも肯えて服せず。所以はいかん。毒氣が深く入つて、本心を失えるが故に、この好き色香ある藥において、美からずと謂えり。

父、この念をなさく、『この子は愍れむべし。毒に中てられて、心が皆、顛倒せり。われを見て喜んで救療をもとむといえども、かくのごとき好き藥を、し

もたちに与え飲まそうとして、次のように言つた。

『この非常にすぐれた藥は、色も香りも味もよく、あらゆる効能が具わっている。そなたたちはこれを飲みなさい。そうすればすぐに苦しみや悩みは消えて、多くの患いもなくなるだろう』と。

多くの子どもたちの中で、本心を失わなかつた子は、その色と香りのよい良藥を見て、ただちに飲んだところ、病はすっかり治つて、元氣を取り戻した。

【非滅現滅】

方、本心を失つてしまつた子は、父の歸りを見て歡喜し、問いたずねて、病氣が治る方法を求めたが、せっかく父がすばらしい藥を与えても、彼らはそれを飲もうとはしなかつた。

なぜかといへば、毒氣が深く入り込んで、本心を失つてしまつたために、彼らはこの藥の色や香りの良さを見ても、それをうまいと思つて飲む心が起きなかつたからである。

その様子を見て、父は次のように考へた。『この子たちはまことに不憫である。毒氣にあたつて心がみな顛倒し、物事の正しい判断ができなくなっている。私の姿を見て、喜び、治療してほしいと思ひながら、すばらしい藥を与え

令服此藥。

即作是言。汝等當知。我今衰老。死時已至。是好良藥。今留在此。汝可取服。勿憂不差。

作是教已。復至他國。遣使還告。汝父已死。是時諸子。聞父背喪。心大憂惱。而作是念。

若父在者。慈愍我等。能見救護。今者捨我。遠喪他國。自惟孤露。無復恃怙。

常懷悲感。心遂醒悟。乃知此藥。色香味美。即取服之。毒病皆愈。

かも肯えて服せず。われは今まさに方便を設けて、この薬を服せしむべし』と。

すなわちこの言をなさく、『汝等、まさに知るべし。われは今衰老して、死の時すでに至りぬ。この好き良薬を、今留めてここに在く。汝、取つて服すべし。差えじと憂うることなかれ』と。

この教えをなしおわつて、また他国に至り、使いを遣わして還つて告ぐ、『汝の父はすでに死しぬ』と。この時、諸の子は、父が背喪せりと聞いて、心大いに憂惱して、この念をなさく、

『もし父が在さば、われらを慈愍して、よく救護せられまし。いま、われを捨てて遠く他国に喪したまいぬ。自ら惟るに、孤露にしてまた恃怙なし』と。

常に悲感を懷くに、心は遂に醒悟しぬ。すなわち、この薬の色香味美なるを知つて、すなわち取つてこれを服するに、

ても、あえて飲もうとはしない。今こそ私は巧みな教化の手段を用いて、この薬を子供たちに飲ませよう』と。

【是好良薬今留在此】

そこで、父は次のように語つた。『そなたたちよ、心して知りなさい。私はもうすっかり年をとつて、身体も衰えてしまひ、まもなく死んでしまふだろう。この素晴らしい薬を今、ここに置いていく。そなたたちよ。それを取つて飲みなさい。飲んでも治らないのではないか、などと心配する必要はない』と。

父は、このように教え終わつて、再び他国に赴き、そこから使者を遣わして、『そなたたちの父は死んだ』と告げさせた。この時、多くの本心を失つた子どもたちは、父が死んでしまったことを聞いて、心から憂ひ悲しみ、次のように思つた。

『もしも、父がおられたならば 私たちを慈しみあわれんで、よく救ひ護つて下さつたに違ひない。今は私たちを捨てて、遠い他国で亡くなつてしまわれた。あらためて考へてみると、自分たちは孤児であり、頼りとする人は誰もいない』と。

【常懷悲感心遂醒悟】

こうして、常に悲しみの気持ちを抱き、くり返しくり返し、嘆き悲しんでいる内に、いつしか本心がよみがえつた。そして、この薬の色も香りも味もすばらしいことに気づき、

其父聞子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。諸善男子。於意云何。頗有人能。說此良醫。虛妄罪不。不也。世尊。

仏言。我亦如是。成仏已來。無量無邊。百千萬億。那由他。阿僧祇劫。為衆生故。以方便力。言當滅度。亦無有能。如法說我。虛妄過者。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

自我得仏來。所經諸劫數。無量百千萬億載。阿

毒の病は皆、愈えたり。

その父は、子がことごとくすでに差ゆることを得たりと聞いて、尋いですなわち來たり歸つて、ことごとくこれに見えしむ」と。「諸の善男子。意においていかん。頗し人の、よくこの良醫の虚妄の罪を説くものあらんや、いなや」と。「いななり、世尊」と。

仏、のたまわく、「われもまた、かくのごとし、成仏してより已來、無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫なり。衆生のための故に、方便力をもつて、『まさに滅度すべし』と言う。また、よく法のごとく、わが虚妄の過を説く者はあることなけん」と。

その時、世尊は、重ねてこの義を宣べんと欲して、偈を説いてのたまわく、

「われが仏を得てよりこのかた、經たる所の諸の劫数は、無量百千萬億載阿僧

それをとつて飲んだところ、毒の病はすべて完治した。

【尋いで歸るを未來に譬う／治子不虛の譬】

父は、子どもたちが、みな藥を飲んで健康を回復したことを聞き、まもなく歸つてきて、すべての子どもたちと再会した」と。そして、仏が「良家の子息たちよ。このことをどう考えるか。誰か、この良醫の嘘の罪をよく告発する者がいるか、どうか」と尋ねられたところ、菩薩たちは「いや、おりません。世尊よ」と答えました。

【合譬】

そこで仏は、次のように語られました。「私もまたその通りである。仏に成つてから、無量無邊百千萬億阿僧祇劫という思慮を絶する長い年月が経ている。多くの生きる者たちを救うために、巧みな教化の方法を用いて、『まさに入滅するだろう』と言うのである。また、この教化の方法はよく法の通りであつて、私が嘘を申したと、告発する者はいないだろう」と。

【偈頌・法譬】

その時、釈尊は再びこのことを宣べようと思ひ、次のように偈を説かれました。

【法説・三世の益物・過去・成道已に久し】

「私が、仏になつてから、これまで經過してきたところの劫は、無量百千萬億載阿僧祇劫というはかりしれない年

僧祇

常說法教化 無數億衆

生 令入於仏道 爾來
無量劫

為度衆生故 方便現涅槃

而実不滅度 常住此
說法

我常住於此 以諸神通
力 令顛倒衆生 雖近而
不見

衆見我滅度 廣供養舍利
咸皆懷戀慕 而生渴仰

衆生既信伏 質直意柔
軟 一心欲見仏 不自惜
身命 時我及衆僧 俱
出靈鷲山

我時語衆生 常在此不
滅 以方便力故 現有滅不

祇なり。

常に法を説いて、無數億の衆生を教化して、仏道に入らしむ。それよりこのかた無量劫なり。

衆生を度せんが為の故に、方便して涅槃を現す。しかも実には滅度せず。常にここに住して法を説く。

われは常にここに住すれども、諸の神通力をもつて、顛倒の衆生をして、近しいえどもしかも見えざらしむ。

衆はわが滅度を見て、広く舍利を供養し、ことごとく皆、恋慕を懷いて、渴仰の心を生ず。

衆生は既に信伏し、質直にして意は柔軟に、心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまず。時にわれおよび衆僧は、ともに靈鷲山に出づ。

われは時に衆生に語る。『常にここに在つて滅せず。方便力をもつての故に、

数である。

【中間の益物】

常に法を説いて、無數億の生きる者たちを教化し、仏に成る道に導いてきた。それより今に至るまで、無量劫という多くの歲月を経ている。

【常にこの処に住す】

多くの生きる者たちに悟りを得させるために、巧みな教化の方法を用いて入滅の姿を示してきたが、本当は入滅せず、常にこの世にあって、法を説いている。

私は、常にこの娑婆世界に在るけれども、多くの神通力を用いて、誤つた見方をして道理を正しく判断できない衆生には、近くにいながら、その姿が見えないようにする。

【現在・非生現生】

すると、彼らは、私が入滅したのを見て、広くその遺骨を供養し、みな恋慕の心を懷いて、何とか私の姿を見たいという熱い願いを懷く。

多くの生きる者たちは、すでに教えに信じて従い、素直にして心がやわらかになり、何とか仏を拝見したいと熱望して、自らの身命も惜しまないようになる。その時、私や多くの比丘たちは、緒に靈鷲山に出現する。

【非滅現滅】

私は、多くの生きる者たちに語る。『私は、常にこの世にあって、滅することはない。ただ巧みな教化の方法を用

滅めつ

余国よこく有衆生しゆじやう 恭敬くきやう信しん

樂者がくしや 我復ががふ於彼中おひちゆう 為説いせつ

無上法むじやうほう 汝等にやとう不聞此ふもんし 但た

謂我滅度いがめつど

我見諸衆生がけんしよじやう 没在もつざい於苦おく

海かい 故不為現身こふゐげんしん 令其生りやうごしやう

渴仰かつやう 因其心恋慕いんごしんれんぼ 乃出ないしゆつ

為説法いせんぽう

神通力じんずうりき如是とせ 於阿僧祇劫おあそうぎにや

常在靈鷲山じやうざいりやうじゆせん 及余諸ぎやうしよ

住处じゆしよ

衆生見劫尽しゆじやうけんこうじん 大火所燒だいかしよしやう

時じ 我此土安穩がしどあんのん 天人常てんにんじやう

充滿じゆまん

園林諸堂閣おんりんしよどうかく 種種宝莊しゆじゆほうしやう

嚴げん 宝樹多華果ほうじゆたけか 衆生所しゆじやうしよ

遊樂ゆらく

滅不滅ありと現ず。

余国の衆生の、恭敬し信樂する者あらば、われはまたかの中において、ために無上の法を説く』と。汝等はこれを聞かずして、ただわれは滅度すと謂えり。

われが諸の衆生を見るに、苦海に没在せり。故にために身を現ぜずして、それをして渴仰を生ぜしむ。その心の恋慕するに因つて、すなわち出でてために法を説く。

神通力はかくのごとし。阿僧祇劫において、常に靈鷲山および余の諸の住处に在り。

衆生が劫尽きて、大火に焼かると見る時も、わがこの土は安穩にして、天人が常に充滿せり。

園林に諸の堂閣あつて、種種の宝をもつて莊嚴す。宝樹に華果多くして、衆生の遊樂する所なり。

いて、滅があり、不滅があることを示す。

他の国土の衆生で、つつしみ敬い、信じ願う者がいれば、私はまた、それらの者たちの中で、彼らのために最高の教えを説くのである』と。そなたたちは、この言葉を聞き入れないで、ただ私が入滅したものとばかり思っている。

【未来・未来の機感】

私が、多くの生きる者たちのありさまを見るに、みな苦しみの海に沈み込んでいる。それゆえ、私は姿を現わさないで、彼らに私を仰ぎ慕う心を生じさせる。そして、その心が恋慕するようになった時、姿を現して法を説くのである。

【常住不滅】

私の神通力は以上のようなものである。阿僧祇劫という長い間、常に靈鷲山やその他の多くのところに私はいる。

多くの生きる者たちが、この世界が破壊される壊劫の終わりに、世界中が大火に焼かれると見る時にも、私がいるこの国土は平穩であり、天界や人界の人びとが常に満ちあふれている。

庭園や林の中には多くの堂閣があり、それらは種々の宝で立派に飾られている。宝の木にはたくさんの花が咲き、果実が実り、あらゆる生きる者たちがその下で遊び楽しんでる。

諸天擊天鼓 常作衆伎
樂 雨曼陀羅華 散仏及
大衆

我淨土不毀 而衆見燒

盡 憂怖諸苦惱 如是悉
充滿

是諸罪衆生 以惡業因
緣 過阿僧祇劫 不聞三宝

名

諸有修功德 柔和質直
者 則皆見我身 在此而説

法

或時為此衆 説仏寿無
量 久乃見仏者 為説仏
難値

我智力如是 惠光照無
量 壽命無數劫 久修業
所得

汝等有智者 勿於此生

諸天は天鼓を撃つて、常に衆の伎樂を
なし、曼陀羅華を雨らして、仏および大
衆に散ず。

わが淨土は毀れず。しかるに衆は焼け
尽きて、憂怖と諸の苦惱は、かくのごと
くことごとく充滿せりと見る。

この諸の罪の衆生は、惡業の因縁をも
つて、阿僧祇劫を過ぐれども、三宝の名
を聞かず。

諸有の功德を修し、柔和質直なる者
は、すなわち皆、わが身はここに在つて
法を説くと見る。

ある時はこの衆のために、仏の寿は無
量なりと説く。久しくあつて、いまし仏
を見たてまつる者には、ために仏には値
い難しと説く。

わが智力はかくのごとし。惠光が照ら
すこと無量にして、壽命が無数劫なるは、
久しく業を修して得たる所なり。

汝等、智あらん者、ここにおいて疑

天界の神々は、常に天上の鼓を打つてさまざまな音楽を
かなで、また曼陀羅華を仏や多くの人びとの上にまき散ら
す。

【不見の因縁】

私の淨土は決して壞れることはないが、多くの生きる者
たちは、燃え尽きてしまい、憂いや恐れなど、多くの苦惱
が充滿していると見る。

この多くの罪ある者たちは、惡業が原因となつて、阿僧
祇劫という長い時間を経過しても、仏・法・僧の三宝の名
を耳にすることができない。

【得見の因縁】

方、功德を修め、心やわらかく、素直な多くの者たち
は、みな私の身体がここにあり、教えを説いていると見る。

ある時には、これらの者たちのために、仏の寿命は無量
であると説き、また長い歲月の末にようやく仏を拝見する
ことができた者には、仏に値うことは非常に難しいと説く。

私の智慧の力はこのようである。智慧の光が照らし出す
ところははかりしれず、無数劫の長きにわたる寿命は、久
しく善業を励んで得たものである。

【皆実不虛を結す】

そなたたち、智慧ある者たちよ。仏について疑いを持つ

疑 當斷令永尽 仏語実
不虛

如醫善方便 為治狂子故
實在而言死 無能說虛妄

我亦為世父 救諸苦患者
為凡夫顛倒 實在而言滅

以常見我故 而生憍
恣心 放逸著五欲 墮於
惡道中

我常知衆生 行道不
行道 隨應所可度 為說
種種法

每自作是念 以何令衆
生 得入無上道 速成
就仏身

を生ずることなかれ。まさに断じて永く
尽きしむべし。仏語は実にして虚しから
ず。

医の善き方便をもつて、狂子を治せん
が為の故に、実には在れどもしかも死す
と言うに、よく虚妄と説くもの無きがこ
とし。

われもまた世の父として、諸の苦患を
救う者なり。凡夫は顛倒せんが為に、実
には在れどもしかも滅すと言う。

常にわれを見るをもつての故に、しか
も憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に
著し、惡道の中に堕ちなん。

われは常に衆生の道を行じ道を行ぜざ
るを知つて、まさに度すべき所に随つて、
ために種種の法を説く。

毎に自らこの念をなさく、『何をもつ
てか衆生をして、無上道に入り、速かに
仏身を成就することを得しめん』と。

ことは止めよ。そのような疑いは永久に断尽せよ。仏の言
葉は真実であり 決して嘘は無い。

【警説・医師警】

それは、父の医師が巧みな教化の手立てを用いて、毒に
犯されて本心を失った子どもを治療するために、生きてい
るのに父は死んでしまったと告げたことが、決して嘘では
ないのと同じことである。

【合譬】

私もまたこの世界の父であり 多くの悩みや苦しみを救
う者である。凡夫は正常な判断を失っているがために、本
当は存在しているものを、入滅したと言うのである。

いつも私の姿を見ているものだから、つい安心して、い
つしかおごり怠ける心が生じ、自分勝手に振る舞い、五感
から生じる欲望に執着して、惡道に堕ちてしまふ。

私は常に、多くの生きる者たちに、修行に励む者とそう
でない者があるのを知つて、それぞれにふさわしいように
導き、そのために種々の法を説くのである。

私はいつもこのように思っている。『どのようにして多
くの生きる者たちを仏道に導き、直ちに仏身を得させよう
か』と。